

## 諏訪兼位著「アフリカ大陸から地球がわかる」

柳 哮\*

Book Review: African Continent Tells Us the Nature of the Earth by Kanenori SUWA

Takeru YANAGI\*

本書ではアフリカの地球科学的魅力が余すところなく語られている。岩波ジュニア版ではあるが、地球科学を専門にする学徒もアフリカのおもしろさに限りない魅力を感じさせられる内容である。

初心者への配慮は至るところでなされている。文章は短く、簡明で、丁寧である。用語の説明は、文章のスムーズな流れに配慮して、4つのカテゴリーに分けられている。文中でされるもの、題を立ててされるもの、括弧書きでされるもの、巻末に纏めて解説が与えられるものである。ジュニア版でありながら、専門家が読んでも面白い。それは豊富な話題と快いピッチでの話題の展開とが読み易くし、読者の興味をそそり一気に読ませるためである。初心者への講義の良い参考にもなる。

第1章は、新たな息吹を始める直前の地球科学の紹介に始まり、名古屋大学と名城大学の学生の発案によるアフリカ縦断の大計画、資金集め、計画を圧縮しての出発、船旅の様子と進み、現場感あふれるリアルなタッチで、いつの間にか引き込まれてしまう素晴らしい導入である。アフリカの第1歩をジブティに記してから、バロアン砂漠の玄武岩、そこで遭遇した屋気楼、ワディの初体験、アフリカでの初ビールのうまさ、フランス詩人ランボオへの遙かな思い、エチオピア地溝帯玄武岩、砂漠に消えるアワシュ川、塩湖の列とフラミンゴ、ツクアラ火山山頂の美しい火口湖、アビシニア高原(玄武岩溶岩台地)、青ナイルと次々に紹介されるアフリカでの新鮮な体験と感激に読者も一緒に体験している思いに浸される。快いピッチで次々に展開する広い話題について興味をそそられ一気に読み進む。1962年のわずか50日間のアフリカ調査の初体験は、著者に強烈な印象を与え、アフリカ調査研究会(名古屋大学)の発足、日本アフリカ学会の創立、さらに10回に及ぶアフリカ調査につながっ

た。

第2章ではアフリカ大陸の構成と歴史を概観すると同時に地球の年齢観が放射能の発見や測定技術の発展によっていかに変化してきたかを述べている。オクロの天然原子炉の発見の経過は余り知られていない事実の紹介もあって興味深かった。アフリカの地質学的发展史を先に置き、煩わしい地層名や地名が現れる地史や鉱床・鉱産資源を後に配列するなど、読みやすさに配慮している。調査中の色々なエピソードの他、先カンブリア時代はキロメータ単位で、顕生代はメータ単位で地層の厚さが表現されているのが面白かった。

第3章はダイヤモンドの起源と鉱山開発にかかわるものである。ダイヤモンドの産地が25億年より古い剛塊およびその周辺に限られていること、ゴンドワナ大陸の分裂に際して沢山のキンパーライトパイプが形成されたことなどが、著者自身の調査に基づいて語られる。南アフリカの1人の貧しい少女の光る小石の発見からダイヤモンド鉱山の開発に至るまでの歴史と3025カラットの世界一のダイヤモンド、カナダ地質学者ウィリアムソンの情熱と涙ぐましい程の努力によるウィリアムソン鉱山の発見と開発、ソ連邦の国家あげてのシベリアでのダイヤモンドの探索などダイヤモンドにまつわる貴重な話題の収録は著者ならではのと思わせられる。

第4章では東アフリカ大地溝帯が大陸の分裂はどの様に進行するかを教えるには都合の良い例題として示されている。東アフリカ大地溝帯は断層陥没地帯を中軸に持つ隆起帯で、その隆起と人類の誕生との結びつきを、70年以上に渡る猿人、類人猿の発掘を紹介しながら示している。

第5章を読んでサハラ砂漠に緑豊かな時代が繰り返されたこと、砂漠の拡大縮小が最近2万年の間に繰り返されてきていることを初めて知った。砂漠化防止がいかに難しいか、地質や気候の基礎知識に加え、社会、経済、政治への配慮と共に、その国の文化をよく理解して実施しなければならないことを、実例を示しながら解説している。

\* 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1  
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門  
Department of Earth and Planetary Sciences, Kyushu  
University, Hakozaki, Fukuoka 812-8581, Japan.  
e-mail: yanagi@geo.kyushu-u.ac.jp